

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

【生産量】 2015/16年度 前年度比 ↓ 前月比 ↑

生産量は、中国で増加するものの、EU、米国、ウクライナ、ブラジル等で減少が見込まれることから、世界全体では前年度を下回り、974.9百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、米国、アルゼンチン、ブラジルで上方修正、ウクライナ、EUで下方修正された。

【消費量】 2015/16年度 前年度比 ↓ 前月比 ↓

消費量は、中国、ブラジル等で増加するものの、メキシコ、米国等で減少が見込まれることから、世界全体では前年度を下回り、971.2百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、国別には、メキシコで上方修正、中国、米国、EU等で下方修正された。

【貿易量】 2015/16年度 前年度比 ↓ 前月比 ↓

世界全体の貿易量は、前年度より減少し、119.3百万トンとなる見込み。

国別には、輸出国では、ロシアで増加し、ブラジル、ウクライナ等で減少する見込み。輸入国では、EU、エジプト等で増加し、イラン、メキシコ等で減少する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、輸出国では、アルゼンチンで上方修正、ウクライナ、米国で下方修正、輸入国では、イランで上方修正、日本で下方修正された。

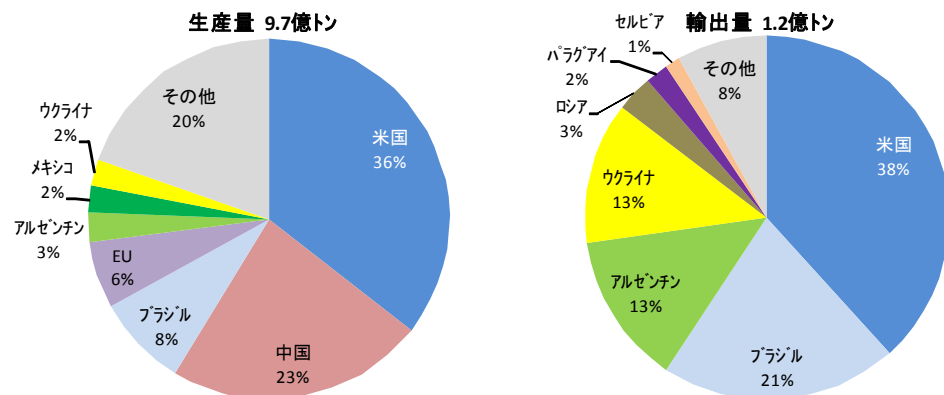
【期末在庫量】 2015/16年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

期末在庫量は、前年度より増加し、世界全体では211.9百万トンとなる見込み。

国別には、EU、ブラジル等で在庫が取り崩されるものの、中国、米国で積み増しされる見込み。期末在庫率は21.8%と、前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、中国、米国、EU等で上方修正、ブラジル、メキシコで下方修正された。

図－1 世界のとうもろこしのシェア（2015/16年度）



表－1 世界のとうもろこし需給（米国農務省）

年 度	2013/14	2014/15 (見込み)	2015/16		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	991.4	1008.8	974.9	2.3	▲ 3.4
米国	351.3	361.1	346.8	2.5	▲ 4.0
中国	218.5	215.7	225.0	-	▲ 4.3
ブラジル	80.0	85.0	81.5	1.5	▲ 4.1
EU	64.6	75.7	57.8	▲ 0.3	▲ 23.7
ウクライナ	30.9	28.5	23.0	▲ 2.0	▲ 19.2
アルゼンチン	26.0	26.5	25.6	1.6	▲ 3.4
メキシコ	22.9	25.5	23.5	-	▲ 7.8
消 費 量	949.5	975.5	971.2	▲ 9.6	▲ 0.4
うち飼料用	570.3	582.8	596.2	▲ 6.3	2.3
米国	293.0	301.9	301.1	▲ 1.3	▲ 0.2
中国	208.0	202.0	214.0	▲ 5.0	5.9
EU	76.5	78.0	75.5	▲ 1.0	▲ 3.2
ブラジル	55.0	57.0	59.0	-	3.5
メキシコ	31.7	34.5	34.3	0.3	▲ 0.4
インド	19.6	22.0	22.3	-	1.4
日本	15.1	14.7	14.7	▲ 0.1	0.0
貿 易 量	131.1	135.8	119.3	▲ 2.7	▲ 12.1
(輸出)					
米国	48.8	47.4	45.7	▲ 1.3	▲ 3.5
ブラジル	21.0	31.0	25.0	-	▲ 19.4
ウクライナ	20.0	19.8	15.0	▲ 2.0	▲ 24.2
アルゼンチン	17.1	17.0	16.0	1.5	▲ 5.9
ロシア	4.2	3.2	4.0	-	25.0
EU	2.4	4.0	1.0	-	▲ 75.0
セルビア	1.7	2.9	1.7	-	▲ 41.4
(輸入)					
日本	15.1	14.7	14.7	▲ 0.1	0.3
EU	15.9	8.7	16.0	-	83.9
メキシコ	11.0	11.3	10.5	-	▲ 6.8
韓国	10.4	10.2	10.0	-	▲ 1.8
エジプト	8.7	7.8	8.0	-	2.6
イラン	5.5	6.2	4.5	0.5	▲ 27.4
コロンビア	4.4	4.4	4.5	-	2.3
期末在庫量	174.9	208.2	211.9	24.1	1.8
中国	81.3	100.5	114.4	23.8	13.9
米国	31.3	44.0	44.7	5.0	1.6
ブラジル	14.0	11.6	9.7	▲ 5.5	▲ 16.4
EU	6.8	9.2	6.5	1.4	▲ 29.8
イラン	4.5	5.8	5.0	0.3	▲ 14.8
メキシコ	2.7	4.2	3.4	▲ 0.0	▲ 19.1
期末在庫率	18.4%	21.3%	21.8%	2.7	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Grain: World Markets and Trade」(10 November 2015)

(2) とうもろこしの主要生産・輸出国等の需給状況

ア 米国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積が減少し、単収も低下することから、前年度より減少し、346.8百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要、エタノール用等需要ともに減少することから前年度より減少し、301.1百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、45.7百万トンとなる見込み。

輸入量は、ほぼ前年度並みの0.8百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も12.9%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、生産量で上方修正、消費量、輸出量で下方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

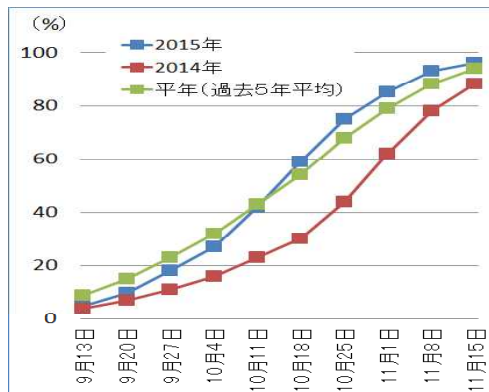
【生育進捗状況及び作柄】

米国のとうもろこし主産地である中西部では、例年、は種作業は4月中旬から5月中旬にかけて行われる。2015年4月、中西部コーンベルト地帯では豊富な降雨により、土壌水分量が潤沢となる一方、は種作業に遅れが生じた。その後、作業は急ピッチで進捗し、は種作業は5月末までにほぼ終了したものの、6月からの長期にわたる記録的な多雨により、多くのほ場で再は種が行われた。多雨の影響を受けたコーンベルト東部では、水分過多により作柄が悪化した一方、西部の作柄は良好となった。その後は早霜の被害もなく、収穫期は乾燥型の天候に恵まれた。

米国農務省(USDA)「Crop Progress」(2015.11.16)によれば、11月15日現在、好天に恵まれ収穫作業は順調に進展し、主要18州のとうもろこしの収穫進捗率は96%と、前年同期(88%)、平年同期(94%)を上回り、ほぼ終了した。伊利ノイ州、ミズーリ州、オハイオ州では100%終了し、収穫を終えた農家は、来年度に向けてほ場整備や農機具の整備、農薬散布等を行っている。

民間調査会社(2015.11.13)によれば、2016/17年度のとうもろこしのは種面積は、2015/16年度を1.9%上回る90.1百万エーカー(36.5百万ヘクタール)となる見込み。栽培採算は、大豆と比べ5～10ドル/エーカー(2～4ドル/ヘクタール)上回るという。

図－2 米国産とうもろこしの収穫進捗率



資料：USDA「Crop Progress」(2015.11.16)
をもとに農林水産省で作成

我が国の輸入先国シェア 1 位 (2014年数量ベース 83.6%)	
世界の生産量シェア 1 位 (2015/16年度 35.6%)	
輸出量シェア 1 位 (2015/16年度 38.3%)	

表－2 米国のとうもろこし需給(市場年度：9月～翌年8月)

年 度	2013/14	2014/15 (見込み)	2015/16		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	351.3	361.1	346.8	2.5	▲ 4.0
消 費 量	293.0	301.9	301.1	▲ 1.3	▲ 0.2
うち飼料用	128.0	135.0	134.6	0.6	▲ 0.3
エタノール用等	130.2	132.3	131.5	▲ 1.9	▲ 0.7
輸 出 量	48.8	47.4	45.7	▲ 1.3	▲ 3.5
輸 入 量	0.9	0.8	0.8	-	▲ 5.0
期末在庫量	31.3	44.0	44.7	5.0	1.6
期末在庫率	9.2%	12.6%	12.9%	1.5	0.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	35.39	33.64	32.64	-	▲ 3.0
単収(t/ha)	9.93	10.73	10.62	0.07	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 November 2015)

写真－1 米国インディアナ州北部(2015年10月26日撮影)
－好天に恵まれ、収穫作業を終えたとうもろこし畑－



写真提供：サム・ジョンソン氏

【バイオエタノール】

米国におけるとうもろこしのエタノール向け需要は、RFS(再生可能燃料基準)によるバイオ燃料の義務付け使用量の段階的な増加等の要因で、とうもろこし需要の約4割を占めるまで増加してきた。2013/14年度には、とうもろこしの豊作により価格が下落したため、エタノール向け需要が大幅に拡大したものの、2014/15年度以降、米国のガソリン需要は低迷しており、2015/16年度のエタノール向け需要はわずかに減少する見込み(図-4)。

エタノールの生産量は、2012年6月に入り、とうもろこしの価格高騰を受け減少し始め、1日当たり90万バレル超だった生産量が7月以降は80万バレル前後の水準で推移した。2013年4月に入り、原料価格の下落及び粗利益の回復を受け増加、85万バレル前後で推移していたが、2013/14年度における米国産とうもろこしの大豊作が確定的となった9月後半以降更に増加し、90～95万バレルで推移、輸出需要の増加と低い原料価格から、2014年12月中旬には99.2万バレルと、米国エネルギー情報局(EIA)が統計を取り始めた2010年以降で最高値を記録した。その後は95万バレル前後で推移している(図-5)。

2015年5月29日、米国環境保護局(EPA)は、2014～2016年のRFS等の使用義務(案)を以下の通り公表した。

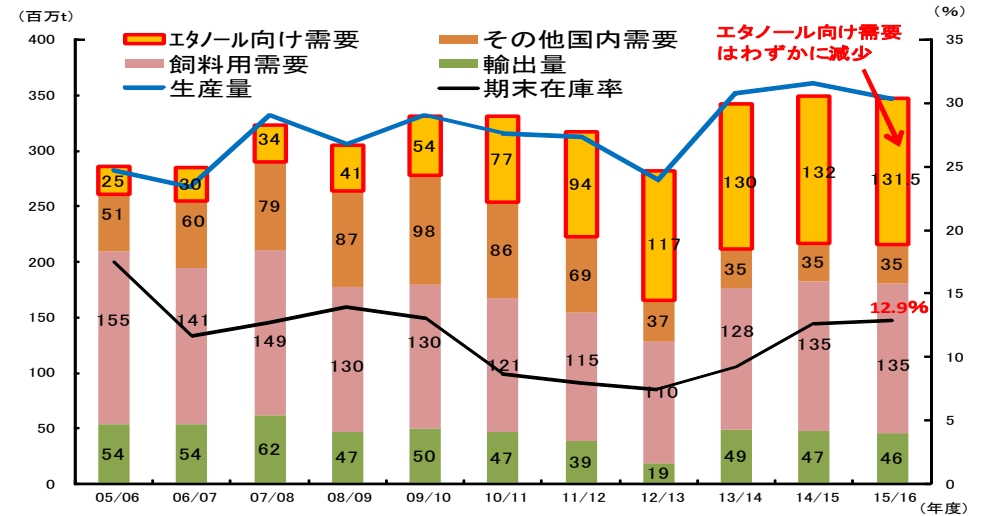
表-3 EPAにおける原料別バイオ燃料の使用義務(案)

	2014年	2015年	2016年
従来型バイオ燃料			
バイオエタノール	132.5億ガロン	134.0億ガロン	140.0億ガロン
次世代バイオ燃料	26.8億ガロン	29.0億ガロン	34.0億ガロン
うち、セルロース由来	0.33億ガロン	1.06億ガロン	2.06億ガロン
うち、バイオディーゼル	16.3億ガロン	17.0億ガロン	18.0億ガロン
合 計	159.3億ガロン	163.0億ガロン	174.0億ガロン

とうもろこし由来のエタノール使用義務量は、2014年は132.5億ガロン(2007エネルギー法：144億ガロン)、2015年は134億ガロン(同：150億ガロン)、2016年は140億ガロン(同：150億ガロン)に引き下げられた。一方、バイオディーゼルについては、2014年は16.3億ガロン(同：10億ガロン)、2015年は17億ガロン(同：10億ガロン)、2016年は18億ガロン(同：10億ガロン)と大幅に引き上げられた。なお、本案は、2015年6月25日の公聴会、7月中のパブリックコメント期間を経て、11月30日までに最終案をまとめる予定となっているが、とうもろこし生産者及びバイオエタノール製造業者からの反発が大きく、調整作業は難航している。

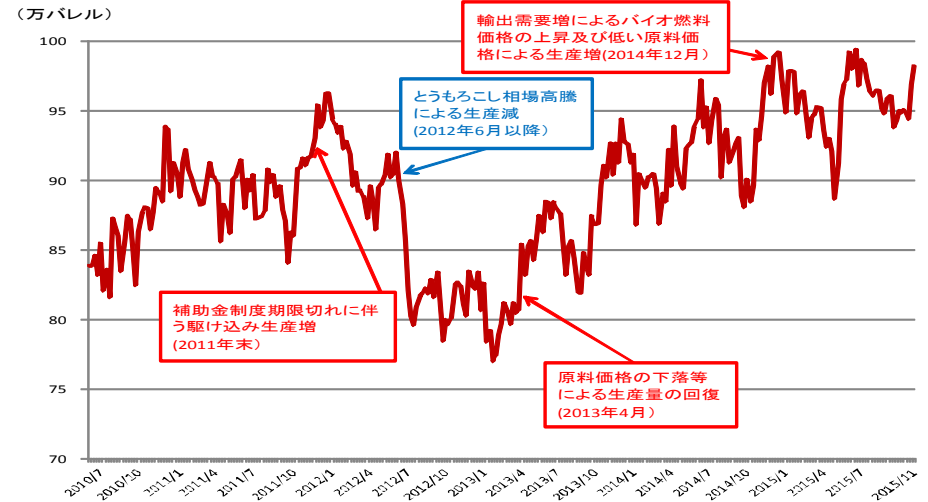
報道(2015.11.13)によれば、全米とうもろこし生産者協会(NCGA)のボーリング会長は、オバマ大統領に書簡を送り、バイオエタノールの混合量の削減を行わないよう要請した。エタノールの原料となるとうもろこしは今年も豊作となり価格が低迷しているため、ガソリンへの混合量を増やしても、燃料や食料価格の高騰には繋がらない旨主張。EPAの案に沿って混合量を削減すれば、とうもろこし価格は更に下がり、農家に深刻な影響が生じる旨指摘し、2007年に定めたRFSを堅持するよう求めた。

図-3 米国ととうもろこし需給の推移
-2015/16年度の生産量、輸出量はともに減少-



資料：USDA「PS&D」(2015.11)等をもとに農林水産省で作成

図-4 米国におけるバイオエタノールの週間生産量(日量平均)の推移



資料：米国エネルギー情報局(EIA)資料(2015.11)をもとに農林水産省で作成

イ 中国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積が増加し、単収も上昇することから、前年度より増加し、史上最高の225.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、史上最高の214.0百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、3.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率も53.5%に上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の期末在庫量で上方修正、消費量で下方修正、2014/15年度の期末在庫量で上方修正、消費量、輸入量で下方修正、2015/16年度の消費量で下方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

国際穀物理事会（IGC）「Grain Market Report」（2015.10.29）によれば、2015/16年度の生産量は227.0百万トンと、前年度（215.6百万トン）を5.3%上回る見込み。華北平原南部では10月上旬の降雨により収穫作業に遅れが生じた。また、黒竜江省及び吉林省の一部で降霜が観測されたが、すでに成熟期を迎えた作物に大きな被害はなかった模様。

【貿易情報・その他】

中国通関（海関）統計によれば、2015年10月の輸入量は、前年同月比62.4%減の4.3万トンとなった。国別内訳は、米国が0.4万トン（同8.3%）、ブルガリアが0.7万トン（同16.8%）。また、2015年1～10月の累計輸入量は、前年同期比164.3%増の457.7万トンとなった。国別内訳は、米国が43.0万トン（同9.4%）と前年同期比56.6%減となった一方、ウクライナは385.1万トン（同84.1%）と前年同期比836.8%増となっている。

2015年4月9日、中国政府は、国家備蓄とうもろこしの競売を前年度より1ヶ月前倒しして開始した。これは、国家備蓄が過去最高水準に達していることが背景と見られている。10月30日までに、116.3百万トンの国産とうもろこしが競売にかけられたが、成約率は3.1%に止まった。一方、輸入とうもろこしは、1.4百万トンが競売にかけられ、成約率は10.3%となっている。国産とうもろこしの平均成約価格は、2,064～2,497元（39,216～47,443円）/トン、輸入とうもろこしの平均成約価格は、2,211～2,371元（42,009～45,049円）/トンとなっている。

報道（2015.11.10）によれば、中国政府は、国産とうもろこしの販売促進及び大量に積み上がった国家備蓄とうもろこしの処分を目的として、南部の飼料業者に対する輸送費の補助金支給を検討している模様。

報道（2015.11.13）によれば、中国政府は、国家備蓄とうもろこしの急増に対処するため、2020年までに国産とうもろこしを減産させる模様。2020年までには種面積を20%縮小し、生産量は175百万トンを目指すという。同国とうもろこし生産量はここ10年間一貫して増加しており、これに伴い農薬使用量も増加している。減産により水質/土壌汚染を緩和する狙いもあるという。

（世界の生産量シェア 2位（2015/16年度 23.1%））

表－4 中国のとうもろこし需給（市場年度：10月～翌年9月）

年 度	2013/14	2014/15 (見込み)	2015/16		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	218.5	215.7	225.0 (227.0)	-	4.3
消 費 量	208.0	202.0	214.0 (218.6)	▲ 5.0	5.9
うち飼料用	150.0	140.0	150.0 (145.0)	▲ 7.0	7.1
輸 出 量	0.0	0.0	0.1 (0.2)	-	400.0
輸 入 量	3.3	5.5	3.0 (3.0)	-	▲ 45.7
期末在庫量	81.3	100.5	114.4 (103.7)	23.8	13.9
期末在庫率	39.1%	49.7%	53.5% (47.4%)	12.1	3.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	36.32	37.07	37.85 (38.20)	-	2.1
単収(t/ha)	6.02	5.82	5.94 (5.94)	-	2.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 November 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (29 October 2015)

写真－2 中国雲南省（2015年10月23日撮影）
－収穫されたとうもろこし－



写真提供：アイ・シー・ネット（株）

ウ アルゼンチン

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、25.6百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、史上最高の10.0百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、16.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も4.3%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、生産量、輸出量で上方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国農務省(USDA)「World Agricultural Production」(2015.11.10)によれば、2015/16年度の生産量は25.6百万トンと、前年度(26.5百万トン)を3.4%下回る見込み。収穫面積は前年度並みの3.20百万ヘクタールとなる見込み。2015年10月の降雨により産地の全域で土壌水分量が改善しており、南部及び中央部では発芽が促進され、コルドバ州及び北東部では、は種作業及び初期生育が順調に進展している。

ブエノスアイレス穀物取引所週報(2015.11.12)によれば、2015年11月12日現在、2015/16年度のは種進捗率は、南部を中心に進展し36.5%となっている。農家は、大統領選挙の結果を待ち、遅植種や二毛作のは種について検討するとみられる。

【貿易情報】

アルゼンチン農牧漁業省農畜食糧衛生品質管理センター(SENASA)によれば、2015年1～9月のとうもろこし累計輸出量は1,484万トン。国別には、ベトナム(231万トン)が最も多く全体の約16%を占めている。次いでアルジェリア(219万トン)、インドネシア(161万トン)、エジプト(139万トン)となっている。

【その他】

米国農務省(USDA)在アルゼンチン農務官報告(2015.10.28)によれば、同国では2015年11月22日の大統領決戦投票を経て、12月10日に新大統領が就任する予定だが、与党候補のシオリ氏、野党候補のマクリ氏のどちらが新大統領に就任しても、農業政策は現在よりも農家寄りに軌道修正されると見られている。は種適期を過ぎた早植種とうもろこしのは種面積は前年度から大きく縮小したが、新大統領の政策次第では遅植種や二毛作とうもろこしのは種面積が拡大する余地があるという。なお、輸出については、東南アジアのバイヤーは米国産よりアルゼンチン産、ブラジル産を嗜好しており、レアル安を追い風にブラジル産が優位に立っているが、2016年3月以降はアルゼンチンも輸出枠撤廃や輸出税引き下げ等を背景に競争力が増す可能性があるという。※11月22日、大統領決選投票が行われ、野党候補のマクリ氏が勝利した。

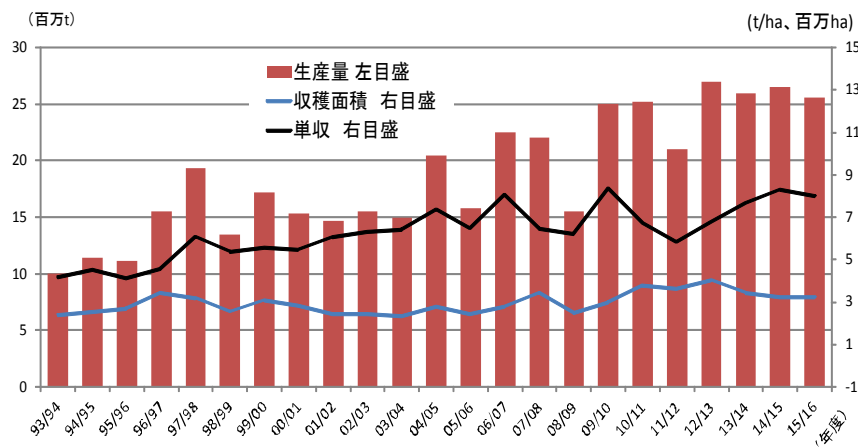
我が国の輸入先国シェア	4位	(2014年数量ベース)	0.4%
世界の生産量シェア	5位	(2015/16年度)	2.6%
世界の輸出量シェア	3位	(2015/16年度)	13.4%

表-5 アルゼンチンのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)

年 度	2013/14	2014/15 (見込み)	2015/16		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.0	26.5	25.6 (26.0)	1.6	▲ 3.4
消 費 量	8.8	9.4	10.0 (12.4)	-	6.4
うち飼料用	5.8	6.1	6.5 (9.4)	-	6.6
輸 出 量	17.1	17.0	16.0 (16.0)	1.5	▲ 5.9
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	0.0
期末在庫量	1.4	1.5	1.1 (1.5)	0.1	▲ 25.8
期末在庫率	5.4%	5.7%	4.3% (5.3%)	0.1	▲ 1.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	3.40	3.20	3.20 (3.75)	0.20	0.0
単収(t/ha)	7.65	8.28	8.00 (6.93)	-	▲ 3.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 November 2015)
IGC「Grain Market Report」(29 October 2015)

図-5 アルゼンチン産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA「PS&D」(2015.11)をもとに農林水産省で作成

エ ブラジル

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積が増加するものの、単収が低下することから、前年度より減少し、81.5百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料需要増から前年度より増加し、59.0百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、25.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も11.5%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の期末在庫量で下方修正、2014/15年度の輸出量で上方修正、期末在庫量で下方修正、2015/16年度の生産量で上方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

夏とうもろこしは、南部を中心に、大豆と競合する8～12月には種され、翌年1～6月に収穫される。冬とうもろこしは、中西部を中心に、早熟種大豆の収穫後、1～3月には種され、7～9月に収穫される。冬とうもろこしは、同国のとうもろこし生産量の6割を占め、その大半が輸出仕向けとなっている。

国際穀物理事会(IGC)「Grain Market Report」(2015.10.29)によれば、南部及び南東部では種される夏とうもろこしは、大豆にシフトする傾向が続いており、収穫面積は20年間で半分以下まで減少している。この傾向は2015/16年度も継続する見通し。なお、夏とうもろこしのは種進捗率は、リオグランデ・ド・スル州で約66%、パラナ州で80%超となっている。ミナスジェライス州では乾燥によりは種作業に遅れが生じている。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の11月報告(2015.11.10)によれば、2015/16年度の夏とうもろこしのは種面積は、5.57～5.85百万ヘクタールと前年度を4.8～9.3%下回り、生産量も26.5～28.2百万トンと前年度を6.4～11.8%下回る見込み。夏とうもろこしの主産地である南部3州(パラナ州、サンタカタリナ州、リオグランデ・ド・スル州)のは種面積は、1.66～1.79百万ヘクタールと前年度を5.4～12.5%下回り、生産量も11.8～12.7百万トンと前年度を9.8～16.1%下回る見込み。これは、とうもろこし価格の低迷により栽培コストの低い大豆にシフトすると見込まれるため。

また、冬とうもろこしのは種面積は9.55百万ヘクタールと前年度から据え置かれ、生産量は54.6百万トンと前年度を0.1%下回る見込み。

我が国の輸入先国シェア2位 (2014年数量ベース 8.3%)
世界の生産量シェア 3位 (2015/16年度 8.4%)
輸出量シェア 2位 (2015/16年度 21.0%)

表－6 ブラジルのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)

年 度	2013/14	2014/15 (見込み)	2015/16		
			予測値(CONAB)	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	80.0	85.0	81.5 (81.9)	1.5	▲ 4.1
消 費 量	55.0	57.0	59.0 (56.0)	-	3.5
うち飼料用	46.0	48.0	50.0 (…)	-	4.2
輸 出 量	21.0	31.0	25.0 (28.0)	-	▲ 19.4
輸 入 量	0.8	0.6	0.6 (0.5)	-	0.0
期末在庫量	14.0	11.6	9.7 (7.4)	▲ 5.5	▲ 16.4
期末在庫率	18.4%	13.1%	11.5% (8.8%)	▲ 6.5	▲ 1.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	15.80	15.75	15.80 (15.26)	0.30	0.3
単収(t/ha)	5.06	5.40	5.16 (5.37)	-	▲ 4.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 November 2015)

CONAB「Acompanhamento da Safra Brasileira de Grãos」(10 November 2015)

図－6 2015/16年度のとうもろこし、大豆のクロップカレンダー

2015/16年度	2015年												2016年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	南部 パラナ州等						は種 5.71 (百万ha)						収穫 27.3 (百万t)						生産量 夏冬計 81.91		
冬とうもろこし	は種面積夏冬計 15.26												は種 9.55						収穫 54.6		
大豆	中西部 マトグロッソ州等						は種 33.04						収穫 102.0						大豆収穫後冬とうもろこし作付け		

資料：ブラジル食料供給公社(CONAB)2015年11月報告をもとに農林水産省で作成。

注：カレンダーの帯の中の数量はブラジル全体のは種面積及び生産量。

オ EU

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、57.8百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、75.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、1.0百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より増加し、16.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も8.5%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2014/15年度の輸入量、期末在庫量で上方修正、消費量で下方修正、2015/16年度の生産量、消費量で下方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

2015/16年度のとうもろこしは、2015年3月上旬よりは種作業が開始され、作業は順調に進捗したものの、6月には西部で、7月からは中央部及び南西部で連日35度を超える猛暑となり、受粉期に高温・乾燥型の天候が続き、結実期にも必要な土壌水分が不足する事態となり、作柄が大幅に悪化した。8～9月には広範な地域で降雨に恵まれ、土壌水分は適切となったが、夏の高温・乾燥型の天候による単収の悪化は大きく、2015/16年度の生産量は57.8百万トンと、史上最高を記録した前年度を23.7%下回る見込み。

米国農務省(USDA)「World Agricultural Weather Highlights」(2015.11.10)によれば、10月に入り主産地の大部分で収穫作業が進展しているが、平年を上回る降雨により、バルカン半島の一部地域では収穫作業に遅れが生じている。

【貿易情報・その他】

EUでは、2015年4月2日、EU域内でのGM作物の栽培承認手続きに関する改正法が発効した。本改正法により、加盟国は、欧州食品安全機関が判断する健康や安全以外の理由でEUが承認した禁止理由リストに基づき、GM作物の自国での栽培を禁止することができる。

報道(2015.11.6)によれば、本改正法に基づき、加盟国の半数以上にあたる19カ国が欧州委員会に栽培禁止要求を提出し、バイオテク企業に対しGM作物の種子の販売地域から自国を除外するよう要求したところ、19カ国全ての要求が認められた模様。

本改正法と軌を一にし、欧州委員会は、2015年4月22日、GM作物の輸入承認手続きに関し、EUレベルで輸入承認されたGM作物であっても、欧州食品安全機関が影響評価した健康・環境以外の理由で、加盟国が自国においてGM作物の使用を禁止することを可能とする改正案を提出した。本改正案に関し、6月8日、欧州議会環境委員会において、保健・食品安全担当委員が改正案の理論的根拠を提示するも激しい批判に晒され、6月9日の同委員会幹事会では、全会一致で改正案に反対した。10月28日、欧州議会において、本改正案は反対多数で否決された。

(世界の生産量シェア 4位 (2015/16年度 5.9%))

表-7 EUのとうもろこし需給(市場年度:10月～翌年9月)

年 度	2013/14	2014/15 (見込み)	2015/16			
			予測値、()はEU	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	64.6	75.7	57.8 (57.4)	▲ 0.3	▲ 23.7	
消 費 量	76.5	78.0	75.5 (77.4)	▲ 1.0	▲ 3.2	
うち飼料用	58.0	59.5	57.0 (61.3)	▲ 0.5	▲ 4.2	
輸 出 量	2.4	4.0	1.0 (3.0)	-	▲ 75.0	
輸 入 量	15.9	8.7	16.0 (11.0)	-	83.9	
期末在庫量	6.8	9.2	6.5 (10.7)	1.4	▲ 29.8	
期末在庫率	8.6%	11.3%	8.5% (13.3%)	1.9	▲ 2.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.66	9.53	9.27 (9.00)	0.08	▲ 2.7	
単収(t/ha)	6.69	7.95	6.23 (6.40)	▲ 0.08	▲ 21.6	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 November 2015)

EU「Balance sheets for cereals, oilseeds and rice」(29 October 2015)

写真-3 仏シャラント=マリティム地方(2015年10月25日撮影)
ーは種から188日目の収穫を間近に控えたとうもろこしー



写真提供: Serge Brossard 氏

カ ウクライナ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より減少し、23.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、8.4百万トンとなる見込み。

輸出量は、生産減に伴い前年度より減少し、15.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率は6.0%とほぼ前年度並みの見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、生産量、輸出量で下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国農務省(USDA)「World Agricultural Production」(2015. 11. 10)によれば、2015/16年度の生産量は、収穫面積の減少及び単収の低下により、前年度(28.5百万トン)を19.2%下回る23.0百万トンとなる見込み。同国西部では生育期に深刻な高温・乾燥型の天候に見舞われたが、東部では好天に恵まれ高単収を達成した地域もあり、西部の単収悪化を相殺した。結果として、同国全体の平均単収は5.75トン/ヘクタールと、5年平均を1.6%上回る見込み。10月以降乾燥型の天候に恵まれ、11月上旬現在の収穫進捗率は約80%と、前年同期を若干上回り順調に進捗している。例年、収穫作業は12月上旬まで行われる。

【貿易情報・その他】

2015年11月10日、ウクライナ農業政策・食料省は、2015年11月9日時点の2015/16貿易年度(2015年7月～)の穀物の輸出量を14.5百万トンと発表した。うち、とうもろこしの輸出量は3.1百万トン。

2015年10月16日、シュリメイステル農業政策・食料省食糧局長は、2020年までに同国のバイオエタノール生産量を年間32万トンまで増加させるべきであり、同分野の成長を阻んでいる障壁を取り払うべきである旨言及した。同局長は、現在バイオエタノールを含むガソリンは、二重に課税されており、また、バイオエタノール生産における要求事項が厳しく定められているため、法制度の整備が必要である旨主張。また、バイオエタノール市場の自由化に向けた優先的な政策として、バイオエタノールの生産における全ての規制を緩和し、違反に関する罰則を強化する必要がある、また、生産管理や運搬に関する電子システムを導入するべきである旨強調した。

2015年10月6日、パヴレンコ農業政策・食料大臣は、2015/16年度のウクライナ産穀物の輸出枠に関し、同省と穀物輸出業者間で覚書の主要部分で合意が行われた旨述べた。とうもろこしの輸出枠は1,600万トン。

報道(2015. 10. 30)によれば、10月15日に予定されていた同枠の覚書は、首相の承認を得られなかったため締結できなかったが、同大臣は、11月末までに、穀物輸出に関する覚書を穀物輸出業者と締結する予定である旨述べた。

我が国の輸入先国シェア	3位	(2014年数量ベース	6.0%)
世界の生産量シェア	7位	(2015/16年度	2.4%)
世界の輸出量シェア	4位	(2015/16年度	12.6%)

表－8 ウクライナのとうもろこし需給

(市場年度:10月～翌年9月)

(単位: 百万トン)

年 度	2013/14	2014/15 (見込み)	2015/16			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	30.9	28.5	23.0 (23.0)	▲ 2.0	▲ 19.2	
消 費 量	9.7	9.4	8.4 (8.6)	-	▲ 10.6	
うち飼料用	8.3	8.0	7.0 (7.0)	-	▲ 12.5	
輸 出 量	20.0	19.8	15.0 (15.5)	▲ 2.0	▲ 24.2	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.0)	-	0.0	
期末在庫量	2.5	1.8	1.4 (1.2)	-	▲ 20.0	
期末在庫率	8.2%	6.0%	6.0% (4.9%)	0.5	▲ 0.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.83	4.63	4.00 (4.10)	-	▲ 13.6	
単収(t/ha)	6.40	6.15	5.75 (5.61)	▲ 0.50	▲ 6.5	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 November 2015)
IGC 「Grain Market Report」 (29 October 2015)

写真－4 ウクライナ ドニエプロペトロフスク州 (2015年11月10日撮影)
－とうもろこしの収穫後、耕起作業が行われたほ場－

